

編集後記

○ 昭和六十一年、丙寅の佳き年を期して、本学では、広島文教女子大学大学院文学研究科の創設という大事業を創めることとなった。この編集後記執筆開始の時点（昭和六十一年元旦午後十一時）では、文部省に大学院の設置申請書を提出、無事に受付が終了し（昭和六十一年十一月二十九日午後五時半）、後は大学設置審議会などの審査を受けるのを待つだけという状況で、正に組板の上の鯉という心境、決して大学院の設置が認可されたというわけではないのであるが、ともあれ学園の意志として大学院設置に踏み切ったこと、それは客観的にはやや問題があっても大学の在り様が大学院設置を表明するだけに充実したことを示しており、更には教授陣容が大学院設置を許すまでに充足したことの反映でもあるのであるから、広島文教女子大学にとって極めて重大な意義を有する企画と言えるのである。

○ 当面、文学研究科には国語学国文学専攻の文学専攻を設置する。種々の事情で英語学英文学専攻・教育学専攻開設は見送らざるを得なかったけれど、いずれはこの専攻も設置

して、ともども研究体制の拡充に努めなくてはならない。大学院を設置する以上、大学院生を受け入れて教育成果を挙げていくことはもちろんであるが、それぞれの専門分野における研究の深化に努め、大学院を設置している大学としての名実ともに備えた具体的成果を学界に示さなくてはならないのである。広島文教女子大学国文学会はもちろん、ん英文学会や教育学会の学会活動を活性化することを基盤として、研究発表の充実、機関誌の発行、学術書の刊行などなど、努力しなくてはならないことが山積する。そして、かねてから企画していた広島文教女子大学地域文化研究所を創設し、陰陽文化交流の要めに位置する本学の地理的文化的特性を生かした地域文化の研究を新しく活性化したいとも考えている。夢は限りなく広がる、教育と研究が相互に支えあい、触発しあつての、大学らしい大学の創成を思ふのである。これも学園が大学院創設に踏み切ったから心新たに考えることであり、先生方と学生諸子の一人一人が大学院大学の一員であることを自覚して、それぞれの研究と教育の拡充に努めるならば、学園の素志は充分に生かされると思うのである。

○ 私事一件、私は修士論文執筆以来、読本

の研究を主要課題としてきたが、読本作者の第一人者たる曲亭馬琴については、できるだけ触れないようにしてきた。それも曲亭馬琴の偉大さが、私ごとき研究者の言及すべからざる存在という印象を与えてきたからであつた。ただ、『三七全伝南柯夢』における身替り心中の読本史における意味と、『南総里見八犬伝』の八房の出自については、新見を提示しておいた。後者についていえば、昭和四十二年「国文学攷」誌上に発表、後拙著『読本の研究―江戸と上方と―』（昭和四十九年刊、風間書房）に改訂収録したもの、要は、馬琴自身が挿絵中に挙例する高辛氏のご事ということになっている八房の出自について、原拠を秘する癖のある馬琴のこととて、鬼卵の作たる『大猫竹篋太郎』という上方製の読本にも早くに素材とされている民話『しっぺい太郎』にその出自を求めたらいかがかというにあった。鬼卵自身、『大猫竹篋太郎』の冒頭に高辛氏のご事を引用して『しっぺい太郎』民話との類同性を指摘しているが、読本作者の意識の共通性を思うことである。

○ 八犬伝論は近時花盛りである、学界における火付け役は、高田衛氏の『八犬伝の世界』（昭和五十五年刊、中公新書）であろう

が、八房の出自についても旧説を整理統括、新見も含めて生彩ある立論をされている。ところが拙論はお目に止まらなかったらしく無視された。しかし『南総里見八犬伝』が執筆される以前に『大猫竹篋太郎』が出版されており、伏姫八房説話と竹篋太郎説話の類同性が動かしがたい事実としてあるので、自説の撤回は必要なしと思いつながら、当時の大患後の療養生活の徒然に『大阪本屋仲間記録』を通覧していると、出勤帳二十二番の記録に、『大猫竹篋太郎』と『絵本室の八嶋』が『趣向同意』であるとのことが見え、従前同じ上方製の読本ではあっても全く別趣のものと思っていたものが、江戸人の目には『趣向同意』と見られていることが判り、これを手がかりに八房の出自について再論するも可なりと思うに至った。

○ 股関節手術後の血清肝炎の後遺症に悩みつづ、研究生活の再開を願い、広島大学の学会で「『白犬』幻想」と題して研究発表し、『近世文芸』第三十九号（昭和五十八年十月）に『南総里見八犬伝』における「八房」の出自についてと題して発表した。この論文は、日本近世文学会の機関誌に発表したこととて高田氏の目に触れたようで、「国

語通信」9の「『八犬伝』札記」なる論文の中に採りあげられた。否定的でなく肯定的に新しい典拠論として採り上げていただいたのであるから、私自身もって冥すべしであるが、

「ただ、〈直接的典拠〉という語を用いるならば、それは「しっぺい太郎」譚（これはもちろん馬琴の考証の対象になり得るのだが）という無形のものよりは、先行作品『大猫竹篋太郎』という作品そのものを指されるべきではなかったか」とまで説かれると、一寸とまどうのである。「しっぺい太郎」譚は黄表紙から合巻に至るまで文字化されて伝承されていただけでなく、「大智人」民話と「猿神退治」民話に共通する「白犬」の靈験譚は、多様な形で文字化されて伝承されていたのであるから、考証癖が強いだけでなく民話にも異常な興味を持っていたらしい馬琴のこととて、たとえ『大猫竹篋太郎』という読本に触発された発想としても、その背景を調査考証したに違いなかったと考えられる。その一端が、『南総里見八犬伝』中の高辛氏説話の紹介などに示されているのであって、民話たる「しっぺい太郎」譚も調査したに違いないというのが私の予断であって、「ここに直接的典拠として民話の竹篋太郎を提示する」とい

う、ややあやふやな論点に固執したいと思うのである。馬琴の民話研究が、文献化されたもののみに限定されているとは考えられないからでもあった。

○ 「近世文芸」発表の論文では触れ得なかったけれど、広島大学の研究発表では馬琴の『陰微』論に触れたことであった。高田氏の『八犬伝の世界』では、『陰微』論が大きく採り上げられ、学界に賛否両論を引き起こしたのであったが、観点によって大きく別れる論点だけに結着のつかないままに今日に至っているものである。私自身の『陰微』論をここに展開する紙幅もないし、実は結論として持ち合わせないのであるが、ただ馬琴の言表していない『陰微』をとらえての『陰微』論が、果たして実りある結論を導き得るのであるうかとは考えている。服部仁氏の『陰微』論のごとく、言表された『陰微』の基本的調査を踏まえての『陰微』論がまずあるべきであろう。自分の読本の原拠については秘匿する癖のある馬琴であるが、これは読本作者一般の作法とも言えるものの、自分の小説作法については語りたくて仕様のなかった馬琴のこととて、八犬伝の陰微についても十分に言表しているのではないか、というのが私の予断

である。言表されざるものをとらえての『陰微』論は、憶断に終る懼れなしとしないのである。

○ 今号の原稿は、原稿集めの苦労は全くなしに集まったものである。このような学術誌の場合、大は大きに、小は小なりに原稿が集まらないという苦労話をよく聞くのであるが、そのような心配は一切なしで締切前に原稿が集まったと、実務担当の綾目先生から聞いたことである。大学院設置という熱気が、こんなところにも現われているのかも知れない。片岡・小川両氏の論考は前号の続編、片岡氏の論は前号に続いて説経浄瑠璃に現われた親子関係について新しい観点を提示されたものであり、小川氏は『聞書(宗碩五百箇條)』の翻刻を完了されたものである。また、下垣内氏のもものは、中国地方における蕉風俳諧の定着という大テーマのもとに書き続けておられるもの、井爪氏と菅原氏の論稿はそれぞれ自己の専門分野における視野の拡大をねらったもの、友定氏の報告はゼミの研究成果の表明というように、それぞれが特徴ある論考を寄せてくださっている。学外の片岡・小川両氏のご好意に感謝するとともに、この『文教国文学』がこの方向を更におしすすめて、将来とも視野狭窄に陥らないよう願うものである。(横山)

『文教国文学』第17号 目次

(一九八五年九月二十五日 発行)

中国地方における蕉風俳諧の定着

—美濃派・その一—……………下垣内和人

『玉たれ物語』について……………井爪 康之

中野重治におけるマルクス主義

—初期の論争を中心にして—……………綾目 広治

説経に現われた親子像(上)……………片岡 徳雄

翻刻 広島文教女子大学蔵本

『いせ物語聞書』……………井爪 康之

岩瀬文庫本『聞書(宗碩五百箇條)』(上)……………小川 幸三

昭和五十九年度国文学科卒業論文題目